Fab施設を利用した産学民連携の可能性の模索
中間報告

研究代表者　道 用 大 介

概要

本プロジェクトは近年急速に広まりつつあるデジタルファブリケーションを扱うものである。具体的には大学がデジタルファブリケーション施設を保有し、周辺地域の企業、市民に開放することでどのような連携の可能性があるかを調査し、Fab施設が大学の価値向上に寄与するものかを考察する。

調査方法

調査方法は神奈川大学湘南ひらつかキャンパス内にデジタルファブリケーション機器を備えたFab施設を開設し、その利用者や企業との連携を実践することで、問題点や今後の可能性について調査する。

経過報告

拙速な結論を避けるために、ある程度の事例が集まった後に考察を行う。そのため、中間報告では施設、利用者数、これまでの事例を簡単に報告する。

①Fab施設開設ついて

本プロジェクトで利用するFab施設はプロジェクトを開始する半年前の

2014年10月1日に本学に開設したKU Fab Studioを利用する。KU Fab Studioは2016年4月1日にファブラボ平塚と名称変更し、世界のファブラボネットワークに加盟した。

②利用者について

2015年度の利用者数は1050名（学外246、学内804)、2016年度9月までの利用者数506名(学外163、学内343)である。

③市民

作ったものをマーケットなどで販売することを目的とする利用者、趣味やプレゼントして利用者、新しい技術の体験の利用者に分類される。

④企業

3Dプリンターで治具の試作を作れるかどうかを試しにきたり、３D事業を始めようとする企業の見学、販売プロモーションのためのワークショップの企画・運営の協力依頼など、利用目的は様々である。また、企業ではないが他大学からの視察も多い。

⑤学生

学生の利用に関しては、コンテストでの優勝など、これまで本学部の学生が活躍できなかった分野での活躍が見られるようになった。また、他大学から本学のファブに関わる学生と合宿をしたいなどの申し入れもあり、大学でのファブ施設の先行事例として注目を集めている。

⑥地域貢献

大学が包括提携を結ぶ自治体からの依頼による見学、体験ツアーなどの実施のほか、地域の子供達に向けたワークショップ依頼などあった。

プロジェクト終了時には上記の事例を詳細に分析し、プロジェクトレポートを作成する予定である。